

N0.61 2010年12月14日

すてきなあなたへ

編集 佐倉市宮ノ台女性井戸端会議
発行 佐倉市宮ノ台4-26-8
tel&fax 043-461-7004

あの頃のニュース映画が見られます！

～アーカイブス、利用していますか～

映画のテレビ放映や VTR、DVD によって、家でも映画が楽しめるようになった。いま情報流出で問題になっているユーチューブやウィキリークスなどでは、これまでのメディアでは目にすることがなかった映像にも遭遇することができる。内容の信憑性は、受け手が担保しなければならない時代になったのだろう。

NHK アーカイブス

ところで、いま、私は、自分が生まれた頃のニュース映画にはまっている。これは、NHK の「戦争証言アーカイブス」というサイトで、1940年6月から1945年9月までに作成され、当時の映画館などで流された「日本ニュース」1～264号が家のパソコンで見られるのだ（欠号があり、現在110本）。もちろん、当時の情報統制の中で、戦意高揚にもっとも役立ったともいわれた「映像」なので、見る側にはそれなりの検証が必要となる。戦闘場面、銃後の暮らしに映る兵士や人々の表情に垣間見る真実、戦勝報道や軍人・政治家たちの演説の空しさを今になって知ることにもなる。

「アーカイブス」とは資料保管庫の意味だが、この「戦争証言アーカイブス」には、「日本ニュース」のほか、「証言・兵士たちの戦争」「証言・市民たちの戦争」があり、日本各地の戦争体験者からの聞き書きを収め、現在361本にもなる。たとえば、「佐倉歩兵第221連隊」のキーワードから検索すると、ニューギニア（ソロン マノクワリ）での過酷な体験を語る8人のインタビュー映像を見ることができる。「戦時録音資料」には、1941年12月8日の東条首相「大詔を拝し奉りて」、1945年8月15日の「玉音放送」をはじめ、「敵機爆音集」などというのものもある。

NHK のアーカイブスにどんな番組が保存されているかは目録があり、ズバリ番組名からも引けるし、平和・環境・NHK スペシャル・大河ドラマ・バラエティなどのカテゴリーから検索することもできる。ただ、見つかった番組をパソコンで見られるわけではなく、川口市の NHK アーカイブス、渋谷の NHK 放送センター、愛宕山の放送博物館などへ出向かなければならない。川口にはまだ出かけてはいない。ものによっては、有料のオンデマンドで視聴できる番組もあるようだ。

なお、日常的には、毎週日曜日の「NHK アーカイブス」（総合）という番組で、小テーマでセレクトされた古い番組2・3本を放送している。「BS アーカイブス名作選」（衛星第2）では、土曜日の深夜11時から、月に2～3回随時放送しているので放送予定をよく見ておくと、もう一度見たい番組に出会えるかもしれない。

最近、私は BS アーカイブスで、「死の国の旋律～アウシュビッツの音楽家たち」（12

月4日23時～放送、2003年11月5日初放映)を初めて見て、衝撃を受けたところだ。収容所の囚人で結成させられた楽団の役割と楽団員のユダヤ人女性たちが自分だけが生き延びたという苦悩、その後の生き方に迫り、その老いに寄り添った番組だった。

さらに、この12月、グーグル傘下の動画閲覧サイト「ユーチューブ」は「NHK番組コレクション」を開設、無料配信を始めた(2010年12月7日、毎日新聞、朝日新聞など)。高齢者にも、インターネット必須の時代に入ったといえよう。

少し遠いけれど、横浜の放送ライブラリー

また、NHKも含め民放や地方局の番組については、横浜の「放送ライブラリー」(神奈川県庁前)がネット上であらかじめ検索できるので便利だ。横浜情報文化センタービルの8・9階で、個人で視聴できるブースがフロアいっぱい並ぶ。同じビルに新聞博物館もあって、各新聞がデジタル化され、検索・コピーも永田町の国立国会図書館より簡便なのがありがたかった。横浜へお出かけの折、立ち寄ってみませんか。(M)



佐原、小野川をゆく遊覧船

ちょっと佐原まで～道の駅がオープンしていました

祭りが終わったばかりという10月の休日、家族で佐原へ出かけた。東京に住んでいた私の小学校時代、旅行といえるものは、近郊への遠足と6年生の修学旅行くらいなものだった。商家だったから家族旅行なんてありえなかったし、そんな経済的なゆとりもなかった。ただ、唯一、多くは旧盆のころ、母の実家があった佐原へ連れて行ってもらうのが楽しみだった。小学校に上がる前、空襲から逃れて、一家が疎開した町でもあった。いとこたちもまだ大勢暮らしていた。その頃は両国乗り換えがほとんどだったような気がする。佐原に近づく車窓に流れる田園風景に、その非日常に、胸がキュンとしたのを思い出す。

佐原駅の南口はさほど変わってはいない。以前、港があった北側には利根川の土手までの広い道、今は市名が変わっての香取市役所、佐原中学校などが目立つ程度。土手に上がって、ゆったりした利根の流れに沿い、水門を過ぎると、この春オープンしたという道の駅「水の郷さわら」があった。「きのうは欠航だったけど、もうすぐ船が出るよ」の誘いに地元の小学生兄弟と乗り合わせ、水郷大橋までの短い船旅を楽しむ。小野川沿いの古い街並みを抜け、ランチの後は、ひたすら香取神宮まで歩いた。いつでも行けると思い、なかなか叶えられなかったのだが、ようやく実現した小旅行だった。(U)

介護保険と特別養護老人ホーム

“弥富あさくら”を見学して

2000年に介護保険がスタートして10年以上経った。介護の社会化、保険制度による権利としての公的介護と謳われたが、認定されなければ介護が受けられずそのハードルは徐々に高くなっている。認定されても施設サービス、とくに特別養護老人ホーム(以下と特養)は待機者が多く、2~3年待ちと言う所もある。特養は終身介護を目的としている訳ではないが、重篤な病気にかからない限り居住できる。また、対象者(世帯全体が住民税非課税等)は保険者(市町村)から**負担限度額減額認定書**を交付してもらうと、食費・居住費が減額となる。介護施設の中で特養だけに適用される制度である。

佐倉市の6番目の特養として今年4月にオープンした**弥富あさくら**を見学した。

八千代病院を母体とする社会福祉法人栄寿会の運営で、デイサービスとクリニックが併設されているが、クリニックはまだ準備中だ。車で5分位の所に川村美術館がある。100室すべてがユニット型の個室で、20室ごとにキッチンとリビングダイニングがある。佐倉市の要請で、ショート分も特養に当てたそうだ。オープン間もないのに待機者が150人を超えたという。施設内は清潔で静か。廊下は広く車椅子が楽にすれ違ふことができる。玄関ホールから続く廊下ではガラス越しに中庭が見え、窓には雪見障子がついていた。個室もカーテンではなく障子が使われ、玄関の陶磁器や家具のインテリアとあいまって和風モダンな雰囲気をかもし出している。日頃、長期の居住空間である特養は個室が当たり前と思っていた。国の方針もそうになっている。しかし、制度改定により食費と居住費が全額自己負担となったため、多床(2名以上)が月1万円前後なのに対し、ユニット型個室は約6万円と高額な部屋代が必要となる。毎月の利用料は介護度により若干異なるが、約13万円。夫婦の一方が特養に入った場合、費用を支払うと配偶者に年80万円以下しか残らない時は**負担限度額減額認定**の対象者となるが、夫婦で入った場合は、一方の収入が住民税課税対象となると課税世帯とみなされ、二人とも減額対象とはならない。

制度改定により予防介護サービスが新たに導入され、要介護1の人が要介護1と要支援2に分けられた。それにともない認定の基準が厳しくなり、徐々に老化が進んでいるにもかかわらず、介護度が下がるという現象が起きている。また、同居の家族が居るというだけで家事支援を受けられなくなった。その中には昼間独居の人も多い。終生保険料だけを支払い続ける介護保険になってしまうのではと危惧をしている。(K)

【特養の居室の種類と利用料金など】

ユニット型個室	リビングがあり8畳以上	月額	約6万円
ユニット型準個室	天井との隙間のある仕切り6畳以上	月額	約5万円
従来型個室	リビングなし	月額	約3.5万円
多床型	2人以上	月額	約1万円

編集後記——8月発行の60号には、幾人からかのお手紙が重なり、お励ましいただきました。ご寄稿はもちろん、印刷・配布についてもご協力、ご支援をお待ちしております。

菅沼正子の映画招待席 33

クレアモントホテル

—人生はいつも驚きに満ちている—

まもなく人生の終着駅にたどり着くというとき、どのような過ごしかたをすればいいのか、この映画はその1つの例を示してくれる。

夫に先立たれたヒロインのサラ・パルフリー夫人（ジョーン・ブローライト）は「これまでの人生、私はずっと誰かの娘で、誰かの妻で、誰かの母親だった。だから残りの人生は<私>として生きたい」という思いで、ロンドンの長期滞在型ホテル、クレアモントにやってくる。

老朽化してはいるもののエレガンス漂うこのホテルの宿泊客は、みなパルフリー夫人のような老人ばかり。いうなれば態のいい「高級老人ホーム」といったところだが、節度ある距離から、他人の人生をのぞき見するのは楽しいもので、次第に交流を深めていく。最近では近所づきあいも希薄になっているが、ここクレアモントホテルでは「遠くの親戚より近くの他人」の良さを実感できる。

ここでくり広げられる人間模様は、個性派ぞろいの俳優たちの演技の競演で、楽しく鑑賞できる。特にジョーン・ブローライトはすごい。私生活では故ローレンス・オリヴィエ夫人で、まるで彼女自身の<現在>を演じているような感じ。老いても背筋はピンとして、自分のことを「パルフリー夫人」としか呼ばせない威厳と迫力は十分。

中心になる物語は、パルフリー夫人と26歳の小説家志望のルード（ルパート・フレンド）との交際。その始まりは、外出先で転びケガをして困っているパルフリー夫人をルードが助けたのだ。いっこうに訪ねてきてくれない娘や孫にイライラするパルフリー夫人は、孫と同年のルードに孫になりすますように頼み、たびたびホテルの食事に招待するようになり、2人は心を通わせていく。

恋愛というにはあまりの年齢差に驚くが、2人を結びつけるものは何なんだろうか？ ホテルの住人たちは「ハロルドとモード／少年は虹を渡る」（71年）みたいだなんて揶揄しているが、ルードは今どきの青年にはめずらしい古典派。なにしろワーズワースの詩を暗誦していたり、デヴィッド・リーン監督の名作「逢びき」（45年）が好きだという。それは亡夫との思い出に重なるのだろうか。またルードは夫人の上品な知性の深さに魅せられるのだろう。年輪を重ねる美しさというものである。

人生を生ききる大切さを教えられる映画である。アナログ人間同士の心のふれあいが余韻を残す。（12月4日より岩波ホールにて公開）

菅沼正子さんのプロフィール

静岡県出身、フェリス女学院短大英文科卒業。映画雑誌『スクリーン』編集部勤務後、フリーランスの映画評論家として、旺文社、集英社、講談社などの雑誌に執筆。著書に『女と男の愛の風景』（マルジュ社）『スター55』（筑波書房）『エンドマークのあとで』（マルジュ社）。2003年～05年までNHKラジオ深夜便「菅沼正子の思い出のスクリーン・ミュージック」に出演。宇田川さんとの軽やかなやり取りを思い出す方も。本誌には30号(2002年)からご寄稿。弁護士のお連れ合いと世田谷区在住。編集子とは学生時代からの友人です。